グレートアース新聞

2024 年 12 月
発行者：GE を大切に思う人たち
発行元：愛知県新城市黄柳野字池田 663-1
第 20 号

南アルプスへ、思いを込めて
～リニア新幹線の光と影を学ぶ 2024～

11 月に３日間かけて南アルプスについて学びました。南アルプスの自然と生き物、そして、リニア新幹線トンネル工事のことを中心に学びます。南アルプスの素晴らしい世界とリニア新幹線トンネル工事とのはざまで今何が起こっているのか、自分の体験と感性で学べる機会を！と考えました。その報告をしたいと思います。このページは学び最終日に完成したメンバー全員の思いが詰まった詩です。この思いに至るまでの学びは次ページ以降でご紹介します。

体験し、考え、学びの最後に生まれてきた思いです。

メンバーが思う、南アルプスを語ってもらい、それを繋げて詩にしました。

詩「南アルプス」

作：GE2024 メンバー

南アルプスというところ

命が生まれるところ
命を育むところ
全ての命が生きているところ
すべての命が死んでいくところ
ホシガラスの誕生
ライチョウの遊び場
ツキノワグマの寝床
イヌワシの夫婦
ホンドリスの食卓
カモシカの便所
たくさんの命が集まれるところ
いろんな命が生きてて、綺麗なところ
いろんなものが巡っているところ

理想の世界
自然の恵みを受け取るところ
美しいというところ
岩が脆いところ
いろんな願いが込められているところ
いまも山が背比べしているところ
木に個性がある
綺麗な花が咲くところ
感動が詰まっているところ
かつて命だったものの結晶
ラジオラリアがあるところ
やけに風が気持ちいいところ
奇跡が連なるいいところ
地球の細胞
トンネルはガン細胞
水のゆたかさ
ナウシカの住むところ
水の都

つながるところ
心で感じるところ
歌いたくなるところ
弁当がうまくなるところ
綺麗すぎて見とれた
便利にしなくていいところ
生き物の気持ちを考えられるところ
人間が試されるところ
成瀬さんが放送禁止用語を言うところ
ニュースにならないみんなの知らないところ
また行ってみたいところ
見た目だけじゃダメ
お母さん
わたし

いま命が壊されているところ
知らぬ間に消えそうな命たち
枯れるかもしれない天鏡池があるところ
人間に殺されそうなところ
奪われつつある安らぎのところ
いまコンクリートが増えているところ
紅葉が減っているところ

地球の未来が託されている
すべての命の源、壊すな
綺麗なゴミムシが輝いてる
南アルプスを守って死ぬのが、大人の責任
これからをつくるのはわたしたち

Day1 「南アルプスの魅力を知る」

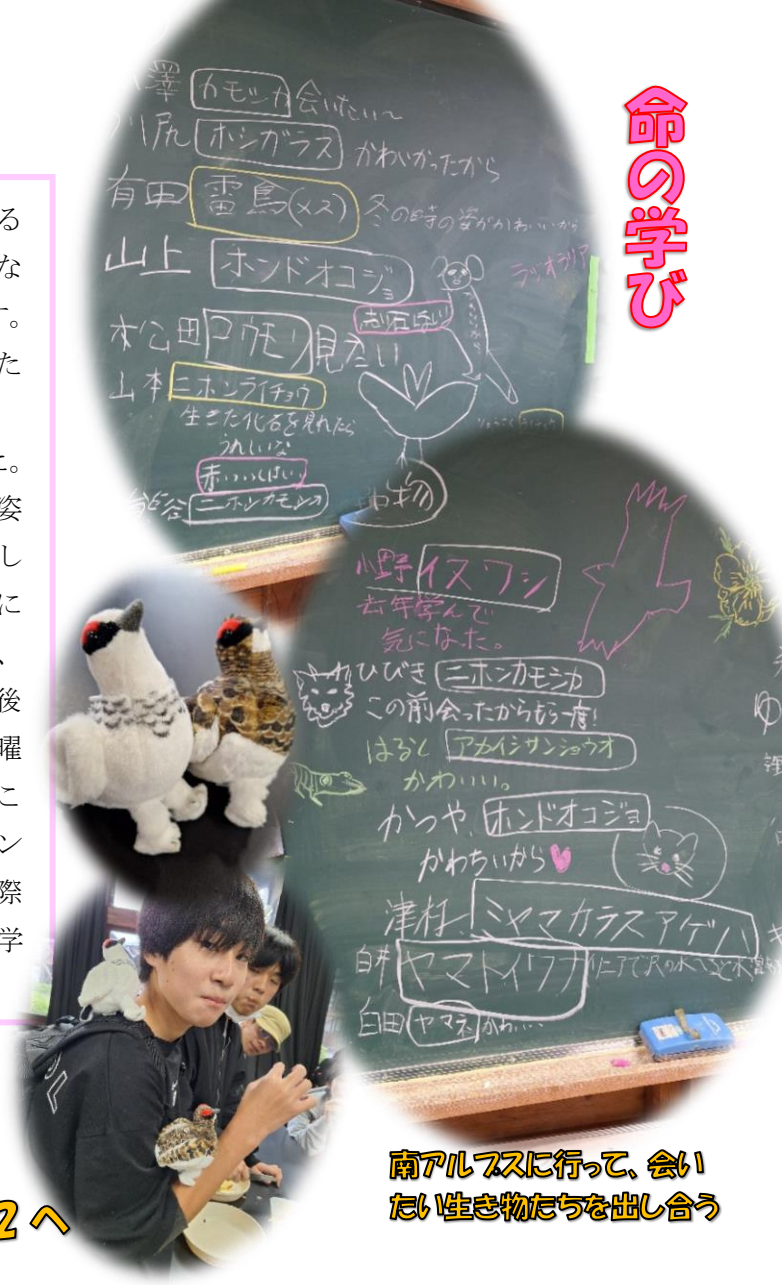
GE も年度後半に入り、自然と人の営みついて考える機会が増えてきました。その一貫で GE が長年テーマにしてきた「リニア新幹線」について学ぶ機会を設けました。リニア新幹線は品川～名古屋を 40 分で移動できるとされています。その通り道に南アルプスがあります。地下に 25 キロのトンネルを掘る計画です。
人が便利になる計画の背景に南アルプスの自然がどうなるのか…一緒に考える時間です。
まずは南アルプスがどんなところなのかを知る時間を設けました。地球の長い営みの中で生まれた南アルプス。未だに年間 4 ミリ大きくなっています。そこにはたくさんの命が溢れています。成瀬さんの沢登り談と共に、南アルプスの魅力を探す時間です。立体地図を触り南アルプスの高さも感じます。
後半は自分たちで南アルプスの命を探してみます。気になる命を 1 人ずつ出してもらいました。気になる理由は「かわいいから会ってみたい」「きれいな姿に惹かれた」「食べてみたい」と様々です。でもその気になる…がとても大切な気がします。今まで気に留めていなかった出会いをすることで、人の心は育っていきます。その気になる…から物事が始まり、知ったり、考えたり、体験に繋がります。今回はその序章です。
そして、やっぱり出てきた命が「ライチョウ」でした。生息数が減っている高山の代表の生き物です。その姿に皆「かわいい！」と興奮。彼らがなぜ生息数を減らしているのか、リニア新幹線が通るということは彼らにどう影響するのか…気になる存在ができたからこそ、自分ごととして考えだしたメンバー。この時間の最後はライチョウを中心に自然の魅力を知りました。木曜日には長野県大鹿村を訪問し、本物の南アルプスをこの目で見てきます。そして、大鹿村はリニア新幹線トンネルの工事が現在進行形で行われている村です。実際の現場で高校生が何を感じるのか。自らの心で感じ、学び、考える時間を大切にしたいと思います。

生き物たちについて語る成瀬さん

南アルプスってどこ？どれだけ高いの？

南アルプスがどこにあるのか、それすら知らないメンバー。どんな自然や生き物がいるのか、知る時間です。
まず、知ろう！それをテーマに始まりました。

知る・始まる



南アルプスに行って、会いたい生き物たちを出し合う

Day2 へ

Day2 「南アルプスの麓へ」

実際に見る・感じる

リニアについて学ぶにあたって、密接に関わる南アルプスを知らずして、感じずして自らの思いを深めることができるのだろうか。何が本当なのか、自らの感性や頭で考えるのは自分自身が本物に出会うかどうか…
そんなことを思い、南アルプスを感じられる場へ行きました。長野県大鹿村です。この村は南アルプスの玄関口であり、リニア新幹線トンネル工事の真っ只中にある村です。村に入る道路に差し掛かり、高校生がビックリしたのは、ダンプの多さです。トンネル工事で出た土砂を運ぶダンプは絶え間なく続きます。その状態に言葉を失うメンバー。そして村の人々はこの中で生活するのか…と思いがよぎります。
そして、次に目にしたのは素敵な紅葉です。色とりどりの山は愛知県には少なく、思わず歓声が聞こえます。村の中心部に到着し、迎えてくれたのは雪化粧となった南アルプスです。今年度初となる雪化粧ということで、運が良いメンバー。ここでも歓声です。しかし、その視界には列をなすダンプ。大鹿村の生々しい現実を目の当たりにします。しかし、今日の主な目的は南アルプスの魅力を体感すること。自然大好きメンバーは到着後すぐに行ったのは「赤い石」探しです。赤石岳の名前のでもある、赤い石→ラジオラリアは生徒を魅了します。まさに南アルプスの恵み。村内では素敵な生き物にも出会いました。なんとい幸せ。そして、南アルプスの絶景ポイントではさらに南アルプスが近く見え、感動の嵐です。あの白い世界にライチョウがいるのか…と雪山を見続けました。それを見ながら、トンネル工事の場所を教えてもらうと…そこはまさに南アルプスのど真ん中。感動の背景に影を感じるメンバー。リニア新幹線が通ることが光なのか影なのか。彼ら自身が今日の経験を含めて感じ、考えることが大切です。
最後には林道沿いの「気になった自然」を探す時間。落ち葉、キノコ、食痕、糞…それは南アルプスに息ずく生き物たちの痕跡でした。
遠い存在だった南アルプスがとても身近な存在となったこの日。彼らはリニア新幹線工事と本当の意味で向きあい始めたかもしれません。
今一度、リニア新幹線の光と影とは何か、自分自身に問う時です。

大鹿村の自然と遊ぶ

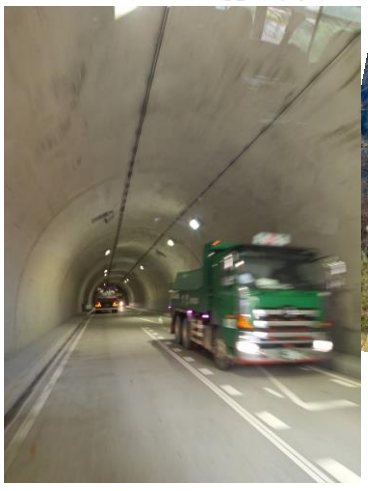
南アルプスの岩盤を作っている赤い石「ラジオラリア」発見

社会を見つめる

今年初冠雪の南アルプスをバックに

南アルプスの麓・長野県大鹿村にて

村内に入ると、工事のためのダンプがたくさん行き交う



あの山々の地下にリニアトンネルを掘る工事計画がある

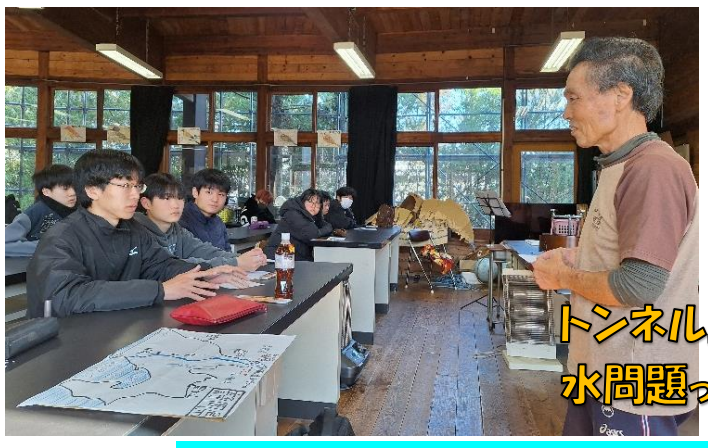
Day3 へ

Day3 「南アルプスの全ての命に思いを寄せる」

前日に南アルプス麓の村、大鹿村を訪問した一同。この日は南アルプスのこと、リニア新幹線工事がどのような計画で行われようとしているのか…を学ぶ時間です。成瀬の沢やクライミングの大先輩であり、長年、静岡県で南アルプスやリニア新幹線について学び、活動している服部さんを招き、お話を聞きました。
しかし、高校生の想像とはかけ離れたスタートで一同、唖然！それは「歌」でした。「つぶつぶの汗をかいて～♪」という歌詞から始まり、歌が始まると講師の方は「君たちが汗をかくときはどんな時？」と問います。
高校生は「クライミングしている時」「ドキドキしてるとき」など回答は様々。
講師の方は続けて「自分は歌が大好きだけど、コンクールや勝負ではなく、一番とかではなく、自分自身が楽しく歌いたいんだ」「クライミングもやるけど、難しいルートが登れればいいのではなく、どんな風に登るか、その先に何があるのか、岩と対話しながら行うのが良い」と語ってくれました。高校生は「南アルプスやリニアの話ではないの？」と疑問を持ちつつ、ついつい引き込まれるスタート。そこからはリニア工事の現状や南アルプスの自然がどのようになっているのかを学ぶ時間となりました。
そして、大切なこととして伝えてもらったのは「人間主体ではなく、全ての命の視点にたって物事を考えていきたい」ということ。それは、最初の話に通じるものがありました。目の前の結果ではなく、その背景や中身、見えないものの価値をどう感じられるのか。
君たちはどう生きていきたいのか…と聞かれている気がしました。南アルプスの話から私たち自身の生き方の話につながるお話であり、未来に向けての話でした。人の便利さを優先し、たくさんの命が失われようとしている現状。本当の豊かさとは何か…高校生が南アルプスを通して丁寧に考える時間です。
後半は、講師の方と成瀬さんが夏休みに行った南アルプス沢登りの報告を見聞きしました。そこはリニア工事で水枯れが心配されている沢です。その源流には生き物たちが集う「池」がありました。「ここも涸れるかもしれない」そう問う報告動画を見た一同は、ハッとしたと思います。池が枯れることは命が枯れることということです。
皆、自分自身の生き方を考えました。全ての命に思いを寄せていまし。
最後は前日に素敵な南アルプスとの出会い、この日の話から感じたことを全員で「詩」にしました。南アルプスについてひとりひとりが語りたいことを紡いだ詩です。（この新聞の１ページを見てください！）
講師の方は高校生のまっすぐな感性に感動し、泣いてしまいました。そして、更なるエネルギーももらっているに見受けられました。
全ての命に思いを寄せ、語り合う時間、それは「明日への希望」ではないでしょうか。

大鹿村で見つけた、南アルプスあれこれ

服部さん（講師）との対話


トンネル工事って何？大井川の水問題って何？命って何？

高校生へのメッセージが込められた服部さんの歌

成瀬さんと服部さん（講師）の大井川源流沢登り報告：

リニアトンネル工事で枯れてしまうかもしれない沢にて、そこには素晴らしい命が溢れていました。

出た！！クマのう〇ち！

南アルプスを源流とする、蛇抜沢。その源流部には素晴らしい池がありました。その名も「天鏡池」。その池の周りにはたくさんの獣道がありした。トンネル工事でこの池が枯れてしまったら、彼らはどうなってしまうのか・・・

南アルプスの学びを経て：生徒の感想

小野裕道（２年）：僕も関東から黄柳野に来ていて、ちょっと来るまでの距離が長いから「リニアいつ通るんだろう？」とか考えるとその影響とか考えたことがなかったです。けど、ダイナミック企画で南アルプスについて学んで僕の南アルプスへの興味が足りてなさすぎたなって感じました。そして、実際に生き物とか自然について学んでみるとまだまだ知らなかったことが多すぎて何でも自分の幸せによった考えや自分の好きに片寄ってしまうから、服部さんも言っていたけど自分の半径１m以外の幸せも考えるのも大切だと思いました。
僕は毎回学校に来るとき、新幹線やバスを使っていますが、その景色を見てキレイだな～とかって思うだけじゃなくて、そこに住んでいる人や生き物、自然を守るためにどうすればいいか考えたいと思いました。

※リニアを通すために亡くなってしまう生き物たちがかわいそうだと思うし、僕にとって未知なことだからもっと日本や世界の環境や生き物の問題を知っていくのが大切だと思った。

宇野咲来（１年）：地質の立ち上がり⇒断層の動きであんなことになるって知って驚いた。
アルプスの初冠雪きれいだった。イヌワシを見れてカッコ良かった。空気がきれいだった。
天鏡池⇒すごくきれいだった。調査した人は何も思わなかったのかな。映像を見て、あんなにきれいだったのに、実際にみて「きれいだな」とか「リニアの工事で何か起こらないかな」とか本当に何も思わず、感じずだったのかなってモヤモヤしています。

山本翔（１年）：南アルプスに行ってみて、南アルプスに行く前は正直リニアのことも知らなかったし、南アルプスすらよく知らなかった。グレートアースで少しづつ南アルプスについてわかってきて、色々な生き物や自然があることを知って、とても大事にされてきたことがわかった。その時はリニアがそれを少し壊してしまうということを知って「少し」だけ悲しくなった。リニアの言い分などを聞いて、なんとなく大丈夫なんじゃないかなって思った。でも南アルプスについてすぐに気持ちが変わった。自分が思っている以上に手が加えられてしまっていて、これで本当にキレイな姿が保っていられるのかなど正直、すでに汚くなってしまっていそうで怖かったし、イヤだった。
　メリットとデメリットがあって、どうすればいいのか、わからなくなった。トンネルが過ぎていくたびに辛かったし、悲しかった。そのあと話を聞いて、本気で向き合っている人を知って、よりなんとかできないかと思いました。

山上渚（２年）：印象に残ったこと⇒（工事の人たちが）自分のことしか考えてないから腹が立つ→最近、権利を持ったバカどものせいで日本が腐ってきてる気がするから。
リニア工事でなくなろうとしている水は 60 万人以上がいただいている命の水だ。南アルプスの上には多くの命が宿っている→今を必死で生きている生物が人間の都合で追い詰められているのが最悪すぎるから。
成瀬さんの服部さんの歌→そこに宿る命こそが、私の歌という歌詞に心響きました。
命の水→そこに住む生き物の生きる糧だからグッときた。
沢登りでみつけた命の水（池）→（自分は）南アルプスに行ったときに、それを見れなかったから。
リニア工事によって失われる可能性がある物が大きすぎてこれからが不安です。人間は愚かです。と思いました。本末転倒。

谷川遼馬（２年）：今回の話を聞いて思い出したことがある。小学生の頃にテレビで見た高速道路の誕生した話について。当時は高速道路を作ることに反対する声が多かった。なぜなら今回の話と同じように、自然に悪影響を与えてしまうから。だけど、どうにか完成させて、便利になったけど、それが当たり前になってしまうと、モヤモヤした気持ちがなくなってしまうのが怖いと思った。

稲葉遼作（３年）：リニア工事のことを知る前は特に意識してなかったけれど、自分の目で南アルプスを見に行ったり、服部さんのお話を聞いてやっぱり便利になるということより大切なことがあると感じました。服部さんのお話でとくに印象に残ったことは、絵本のような理想の世界を大切にしているということです。服部さんの言うように皆が仲良しなら戦争も起こらないし、自分勝手な考えで人を傷つけたり、自然の生き物や植物にも目を向けられるのにと思ったからです。僕も理想を大切にしたいと思っているのですごく感動しました。僕の理想はみんなが笑顔で笑って過ごせる世の中にしたいです。

小澤蓮（２年）：話を聞くと、リニアができても乗るの怖いなって思った。土地が崩れやすいから、仮にできても、地震が起きたら使えなくなりそう。南アルプスは元は４０００ｍあったのビックリした。
相手の気持ちを考える、はよく話するし、みんな言うけど「生き物の気持ちを考える」を考えるは自分にない考えで言葉だった。リニアを作るにあたってのリスクが自分のことばかりでそこに住む「生き物たちの気持ち」はいっさい考えられてなくて悲しくなった。
リニアができるまでの長い時間で、そこにいる人、生き物の「不安」はいつか解消されるのか、自分がその立場だったら、と思ったら辛くなった。服部さんの絵本の話がすごく心にささった。子どもに未来を思う、優しい心になってほしい、そんな絵本がいい。戦争とか、血が流される絵本はやだ。今の大人もそんな優しい心でいてほしい。

恒川玲（２年）：リニアができることは日本にとっていいことだと思っていたけど、そんなことはないなと思った。無知って怖いなと思う。世間はリニア反対する方を悪と言っているイメージだったから、ニュースや記事だけで判断してしまっている人たちにも今回の授業のような場があったらいいのにと思った。もしも、リニアを作ることで、地下水が川に流れず漏れたり、他の場所に流れるとなったら、生態系への影響は測りえない。それに、大井川が静岡県民の生命線なのなら、より穴をあけるべきではないと思った。自分たちの首をしめてる！新幹線があるのだから、ぜいたくいうな！私たちの未来をうばわないでほしい。

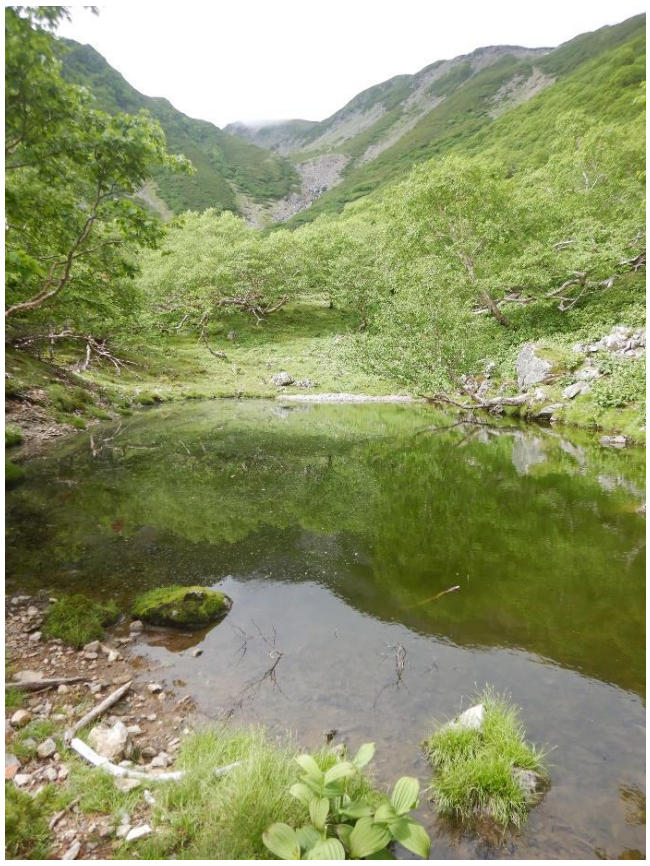
成瀬陽一「魂の叫び」

天鏡池のほとり

リニア新幹線が良いとか悪いとか語ってしまう前に、たとえばこの天鏡池のほとりに、ひとり佇んでほしい。風雪によって傾いたダケカンバとあおいあおい草地に囲まれて、この池は何百年、何千年と存在し続けてきた。そして、遥か下の急斜面から池の縁に向かって続く一本のケモノ道を見つけ出してほしい。一際明瞭なこの道の存在は、多くの動物たちがこの池を生きるための寄り所としている事を物語っている。豊かな、真に豊かな世界がそこにはある。

大自然の摂理では、富める者も貧しき者も皆、平等であるように、地球というこの奇跡の星の上では、あらゆる命が等しく尊い。リニア新幹線の問題に限ったことではないが、常に人間を中央においた価値観や善悪の判断で議論が進められていくのは、甚だおかしくはないか。

もの言わぬ生きものたちの叫びは、いったいどこへ行ってしまうのか。自らが蔑ろにすらえ気づかない彼らの尊厳を踏みにじってもいいものなのか。



人間と他の生きものとの間に壁をつくる人間は、必ず人間と人間の間にも壁をつくるだろう。その考えが差別や争いを生み出してきた。

今、僕たちは転換期を迎えている。地球から一方的に奪い続けてきたツケが回ってきている。今、ひとりひとりが自分ごととして、即行動に移さなければ手遅れになるのは明白だ。

もちろん、あなたが完璧ではないように、僕も完璧ではない。むしろ穴だらけだ。文明に甘んじているのも確かだ。けれど、どんなに自分が批判にさらされてもかまわない、大切なのは、僕やあなたがどちらを向いて生きていこうとするかだ。

「どんなに傷ついても、地球の未来を信じて生きていく。だからあなたにも、部屋を飛び出し、山や谷に分け入り、深い自然の中に身を置いてほしい。

誰かに教わることではない。

あなたの心の奥底から、泉のように湧き出す思いを僕は信じている。

成瀬陽一

編集後記（さ）
南アルプスの学びにはＤａｙ４があります。それは二学期最後の授業で絵本「さいごのワシ」作：椋鳩十を読んだことです。椋鳩十さんは大鹿村近くの泰阜村出身です。子どもの頃から南アルプスの麓で遊び、たくさんの命と出会い、その命に魅了され、絵本作家になってからたくさんの命の絵本を書いています。さいごのワシは南アルプスに住むイヌワシのお話です。高度経済成長真っ只中である時代の、人と生き物たちのお話です。人が自然への畏敬の念を忘れかけ生き始めてしまった時、イヌワシたちはその姿からメッセージを残してくれていました。
彼らの生き様から何を感じ、どう生きていくのか。今回、自らの感性で学んできたＧＥメンバーであれば、更に深く命を感じられるのではないかと思い、読みました。南アルプスが身近で愛すべきものになってきたメンバーだからこそ、感じられることがあるはず。そう思って読みました。読み終えたあとのメンバーの顔は真剣そのもの。もう南アルプスの命たちは彼らにとって他人事ではありません。
南アルプスに限らず、命が危機に瀕することが多いこの時代を、希望の未来にするために、立ち上がるのは今です。